

印西大師 番外 山田・不動院

1 名称 (No.130/244)〔手引鏡：不動院〕〔資料館：不動院〕〔行程表：不動院〕

2 場所 印西市山田851付近 林の中

山田・円天寺から道程約240m

宮後構造改善センターやワタナベ農機の南約90m

GPS座標 35.77387459198714, 140.23868342217884

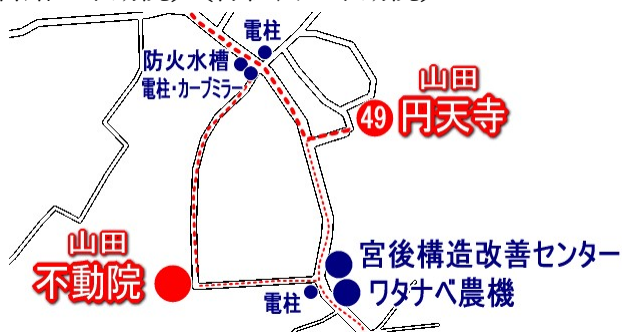
3 由緒

4 御堂 林の中で御堂の中が暗くてよく見え

ません。板状の石の上部が浮彫りで大師像になっているようです。五鈷杵は見えません。正面下には光明真言の文字が見えます。堂内にはほかにないのでこれが御大師様(1体)と思います。御堂の御詠歌は弘法大師のものですし、御堂の側面には昭和42年の「大師堂再建寄附者芳名」板があり、そもそも地元の方に教えてもらった大師堂なので、ここで間違いはないでしょう。

5 境内 林の中に大師堂がある。

6 写真 (2023.01撮影)



大師堂



浮彫の御大師様



御詠歌



ワタナベ農機付近から大師堂方面



大師堂からワタナベ農機方面



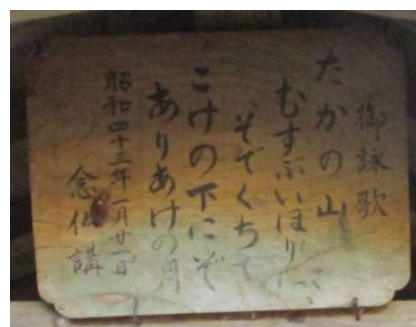
林の中の大師堂

7 情報

(1) 山田不動院の御詠歌

「高野山 結ぶ庵に袖朽ちて 苔の下にぞ 有明の月」(高野山金剛流御詠歌 高祖弘法大師第2番)

弘法大師様が高野山奥の院へ御入定されたのは、承和二年三月二十一日(八三五年)の事でありました。その後お大師様は、法印大和尚の位を賜り(八六四年)、さらに八十六年後に弘法大師の御称号を賜りました。そのお名前を下さったのは醍醐天皇ですが、ある夜、一人の僧が天皇の夢枕に現われ、この歌をお



詠みになられたと伝えられています。醍醐天皇の夢枕に、身にボロボロの袈裟衣をまとった一人の修行姿のお坊さんがたたれ「高野山、結ぶ庵に・・・」の和歌をお詠みになられたのであります。翌朝、さっそく側近の侍従にこの歌を示されると、「高野山」とあるのできっと紀の国の空海上人に違いないといわれました。その頃、ちょうど時を同じくして、醍醐天皇に、空海上人へ「大師号」を賜わりたいと真言宗長者（真言宗の最高にも値する位）である高僧観賢僧正より上奏されていましたので天皇のみ心にも関心があった事だと思います。醍醐天皇は、さっそく大臣に命じて弘法大師の「大師号」と、桧皮色の袈裟衣をお授けになり、高野山へ参籠いたしました。弘法のおくり名は、今も生きて、法を弘め、私達をお救い続けて下さっている空海上人は、弘法利生の菩薩であるという意味から「弘法大師」の大師号が下賜されたのであります。天皇の命によっておくり名と御衣をたずさえた勅使と高僧観賢僧正は高野山の奥之院へ参りました。勅使が奥之院の静寂の中で天皇よりの勅書を読みあげると、弘法大師の御厨の中より、「われ昔、さった薩たと遇い親しく悉く印明を伝う、無比の誓願を発して辺地異域に倍す。昼夜に万民をあわれんで普賢の悲願に住し、肉身に三昧を証して、慈氏（弥勒菩薩）の下生を待つ」という御声がありました。このお言葉の意味は、「私は、ありとあらゆる所に現れ、弥勒菩薩がこの世に生まれるその時まで万民を救いつづけます」という意味です。また、観賢僧正は、お授けいただいた袈裟衣を奉じて御衣替えを申しあげたという事です。それ以来、毎年一度旧の三月二十一日に、天皇より御下賜の御衣を替える儀式が現在も続いています。

和歌の大意は、高野山の小さな庵の中で袈裟衣が破くれ朽ちながらも私達を救い続けておられる姿は、あたかも、夜を有咀の月が照らすごとく、世間を照らしているようだ。（「高野山 真言宗 寶珠山 萬福寺」HPより）